Faculty Development
INVITATION

山梨大学教育学部
第39号
March 22, 2022

2021年度のFD事業

2008年に大学設置基準の改定が行われ、FD（Faculty Development）が義務化されてから大学では多様なFD研修が行われるようになりました。しかし、この十数年で本当にFDは定着したのでしょうか。日本は18歳人口の漸減期に入っていますが、諸外国のように高校・大学卒業後に一度社会に出た人が大学で学びなおすリカレント教育の体制が果たして整っているのでしょうか。国立大学法人においては、運営費交付金の減額による研究力の低下は防げるのでしょうか。

こうした荒波の中で、山梨大学教育学部は、優秀な教員を育成するという学部の使命に向かって教職員が尽力し、日々FD活動を行っています。

コロナ禍によって、予定が変更になることもしばしばでしたが、2021年度は、赴任直後の初任者研修（４月26日、８月26日、10月27日)、附属学校園での初任者研修（７月１日、５日：附属中学校、７月５日、６日、８日：附属小学校、11月26日：附属幼稚園、12月７日：附属小学校)、FD研修会（７月７日、８月４日、11月24日、12月８日)、教育FDフォーラムおよび学生代表と学部長との懇談会（12月23日）などが行われました。

こうした研修をきっかけとして、学生や教職員の意識改革がさらに進展することを望んでいます。

FD委員会委員長　栗田 真司

2021年度教育学部FDフォーラム報告

2021年度教育学部FDフォーラムが、12月23日（水）に、J号館A会議室にて行われました。

FD（Faculty Development）は、教育や研究等の環境をより良くするための取り組みです。その一環となる本フォーラムは、教育学部の各コース、特別専攻科、教育実践創成専攻（教職大学院）の学生・院生代表に出席いただき、学部長、学系長、副学系長、教育・研究・就職活動等に関わる委員会の代表教員や職員との懇談を通して、大学の課題と今後について考える機会として、開催されています。

今年度のテーマは、昨年度に引き続き、「教員養成の現状と今後の在り方」というものでした。最初に、古家学部長から、次のような説明がありました。

- 教育学部の教員学生比率は２対１程度、ほぼマンツーマンの手厚い教育を行い、全校種・全教科の免許を出すことができている。
- 現場体験が、教育実習だけでなく、教育ボランティアや地域学習アシストなどにより、充実している。
- 山梨県教育委員会と強く連携し、教育委員会が抱える課題を検討し、教員養成と研修に力を入れている。
- 教職支援室や相談体制の充実、教員の対応により、山梨県教員採用二次試験の合格率は80％になった。
- 附属学校において先進的な研究が行われ、教育実習も充実している。
- 2019年から教職大学院が拡充され、現職教員とストレートマスター院生の交流が充実している。
- 山梨県小学校教員養成特別教育プログラムが創設され、山梨の教育の状況を理解する教員養成が始まった。
- 今後、ICTの活用技能や教育方法に関する体系的な授業内容の過程を構築していく。
- コロナ禍において、学生のみなさんにはさまざまな協力をしてもらったことに深く感謝している。

その後、学生代表から、授業・実習や就職・研究支援について、活発な意見が出されました。学部生からは、小学校における自分の専門以外の科目の学習指導案の書き方やICT教育に習熟するための更なる指導の要望が出されました。専攻科からは、さまざまな取組に学生が関わりやすくなるように、対象範囲に専攻科も入っていることを分かりやすく示してほしいという意見がありました。教職大学院からは、学部生との交流の機会をいままで以上に設定してほしいという願いが出されました。紙幅の関係で全ての意見を紹介できませんが、参加した全ての学生・院生から発言があり、要望や質問に対して、教職員から応答がありました。

参加いただいた学生・院生代表と関係教職員に、感謝いたします。

FD委員会副委員長　齋藤 知也

FD研修会

第１回 FD研修会
「GIGA スクール構想と教職課程見直しの動向」

2021年７月７日に第１回のFD研修会が開催されました。講師は、文部科学省生涯学習政策局で長年にわたって情報教育行政を担当され、現在は山梨県教育委員会の理事をされている降籏友宏さんです。講演は、これからの社会の更なる情報化（Society 5.0の社会へ）、新学習指導要領と「情報活用能力」、学校教育におけるICTを活用した教育の現状、GIGAスクール構想によるICT環境整備、GIGAスクール構想によるICTを活用した教育の実践、ICT環境などの変化を踏まえた教職課程見直しの動向、といった内容でした。アンケートの自由記述には、「コロナ禍の中で、追われるように進めていたICT活用でしたが、今回お話を伺うことで、改めて全体像を知ることができました。」、「今後の教育課程の動向については、一部の人間が知っているだけではなく、すべての教員が共有すべき内容だと感じました。」などの感想が寄せられました。

第2回 FD研修会
「学生のSOSをどう受け止めるか」

川本 静香

コロナ禍で学生のメンタルヘルスの悪化が懸念される中、いかに学生のSOSに気づき、対応すればよいかについて、自殺予防の観点から報告をさせていただきました。本研修会では、自殺に至る心理過程や、自殺に傾いた人の心理的特徴の他、自殺のリスク因子等について説明を行いました。

SOSにいかに気づくかという点においては、ハイリスクの学生の中には自ら助けを求めることが出来ない場合もあるため、履修状況（授業に出てこない、連絡に返信がないなど）に気になる点があったり、リスク因子を複数抱えている学生については、積極的に教職員からアプローチをして行く必要があります。また、対応にあたっては、必要に応じて学生サポートセンター等との連携が求められます。次年度以降も、まだまだコロナ禍の影響は続くと思われます。本研修会が日頃の先生方のご指導、ご支援の際に少しでも参考になれば幸いです。

第3回 FD研修会
「義務教育における、主体的、対話的で深い学び」

古屋 啓一

今回の研修では、まず、指導要領の背景として、「これからの社会を生き抜くために必要な力の育成」「知識は容易には転移しない」の二点を挙げ、知識偏重教育からの脱却が必要なことをお伝えし、続いて、主体的な学びには、「課題依存型」「自己調整型」の観点があり、特に前者では、教師の課題が重要であること、また、対話的な学びでは、自己内対話や外化が重要であることについてお伝えしました。

次に深い学びについてD･P Ausubelの説を引用し、既有知識と関連づける学びであれば、生徒が発見しても、教師が説明しても「深い学び」であることをお伝えしました。

最後に授業例を、参加型で紹介しました。「菜の花や月は東に日は西に」および「おぼろ月夜」の月の形は？という国語の授業ですが、理科の知識と関連づけないと解けません。特に後者には正答がなく「納得解」を考える必要がある設問でした。

本研修が「主体的・対話的な深い学び」理解のために少しでもお役に立てば幸いです。

第4回 FD研修会
「アクティブ・ラーニングの変遷と実践」

中込 繁樹

第４回ＦＤ研修会において、教育施策におけるアクティブ・ラーニングの変遷とそれを意図した教職大学院における授業実践に関する報告を行いました。

研修会では、最初に、アクティブ・ラーニングという言葉が文部科学省の施策用語としていつどのような背景で登場したのか、そして、それがなぜ、「主体的・対話的で深い学び」という言葉に置き換わっていったのか、各種の中教審答申等を紐解きながらその概要を説明しました。

その後、アクティブ・ラーニングの実践例として、担当している教職大学院の授業「教育・地域課題挑戦プロジェクト実践論」について報告しました。本授業は、ケースメソッド教育を援用しながら、院生の能動的な学修を目指して企図されています。スライドや動画を通して、山積する教育課題に対して、主体的に関わってケースを想定したり、議論を交わ

したりする院生の姿をご覧いただきました。課題発見・解決に向けて、現職とストマスの院生が協働的に学び合う教職大学院ならではの良さが生かされた授業となっていることをお伝えすることができました。

研修会後に先生方からいただいたご意見やご感想をもとに、さらに、より良い授業となるように改善と工夫を重ねていきたいと思います。

附属学校園での研修報告

言語教育講座　磯部 美和

2021年11月26日に初任者研修で附属幼稚園に伺いました。まず荻原副園長先生より園の概要や取り組みを伺った後、主に年中クラスの園児と遊び、最後にお弁当の時間を観察しました。

多くのことが印象に残りましたが、そのうちの１つは、先生方が園児に寄り添い、あたたかく見守り、また園児の希望や意見を大切にされていた点です。たとえば、翌月のクリスマスのために作ったリースや折り紙の飾りをどこに飾るかを決める際、先生方が園児一人ひとりの気持ちを大切に考えていらっしゃることが強く感じられました。また、どの園児も完璧に感染対策を行っていたことに感心しました。登園時やお弁当の前にはしっかりと手を洗い、全員で１つの教室に集まる際には自分のスペース内で静かに活動し、お弁当は飛沫ガードで仕切られた自分専用の席で静かに食べ、食べ終わったらすぐにマスクを着け、と大人が見習わなければいけないほど徹底されていました。さらに、私の専門分野である母語の獲得、特に複合名詞（２つ以上の名詞が組み合わさってできた名詞）の獲得に関しては、お母さんから木の名前を「ハナミズキ」と聞いた際「鼻水の木？」と言った園児の興味深い発話を教えていただいたり、見開き一面にたくさんの複合名詞が載っている絵本を見つけたりすることができました。

コロナ禍という大変な状況の中にもかかわらず、研修を受け入れてくださいました附属幼稚園の先生方に心より感謝申し上げます。

芸術身体教育講座　関口 浩文

ＦＤ研修として、附属小学校６年１組の皆さんと約１日一緒に学習させていただきました。40年ぶりとなる小学校の授業は国語、体育、英語、社会の試験、給食、掃除、算数でした。もちろん、社会の試験は何とか回避しました。今回、小学校で英語の授業は初めて受けましたが、昔は中学で学習する内容をいとも簡単に児童はペラペラしゃべっていたので非常に驚きました。また、体育では私の専門スポーツであるバスケットボールを希望・受講させていただき、大学におけるコース専門科目の授業でどのような授業を展開すべきかに関して考える機会をいただきました。アイディアが非常に大事だと常々研究活動をしながら思っているところではありますが、小学校の授業はまさにそれが大事で、８人チームを４人ずつに分け、兄弟チームと呼んで、互いに良い点、悪い点を話し合わせたり、ゴール下にフリーシュートエリアとして四角い枠を設け、この枠内に入ったらオフェンスを邪魔してはいけないなど、得点し易くする工夫がありました。このように授業のねらいに向けたアイディアの創出や工夫を大学の授業でも学生には期待したいと思います。

最後に、掃除がひと段落し、「他にやることある？」と児童に聞いたとき、「それは自分で考えないと！」って教えてくれた児童、並びに附属小学校の諸先生方に深く御礼申し上げます。黒板には「積極的に考動しよう」と書かれていました。

科学教育講座　吉田 夏海

山梨大学附属中学校において、最初に保坂伸副校長や志村結美校長から中学校の教育理念、沿革や校内研究等に関する説明を受けました。

その中でも、山梨大学および附属４校園が密に連携している点、延いては周辺地域との交流も活発である点、同時・非同時双方向型のオンライン教育を含むICT育にも力が注がれている点が特に興味深いものでした。

数学・英語の授業を参観した際、数学では、抽象的な文字式を生徒達に如何に理解させるかという点に焦点が当てられていました。一般的に、小学校における教科「算数」から、より抽象性の増した「数学」へと移行するという意味で、中学校数学教育は正にその転換点にあるといえましょう。このことを授業風景を通して再認識することができた点が今回の研修の主たる収穫でした。

一方で、本研修を通して「啐啄同時（そったくどうじ）」という言葉について思いを馳せることにも繋がったという点も付け加えたいと思います。これは師（導く者）弟（学び伸び行く者）の呼吸が一致して初めて弟子が悟りを得るという意味の禅語で、しばしばその意味することから教育における理想の１つとされる言葉です。卵の中の雛が殻の内側から鳴くことが「啐」、それを聞きつけ親鳥が殻の外側から突くことが「啄」、従って両者の呼吸が合って初めて雛が誕生する。このように生徒や学生が学ぼうとする姿勢・理解する兆しを教員は如何にして察知し得るか、大学教育においても模索が欠かせないとの認識を新たにしました。

編集後記

FDとは “Faculty Development” の略で、大学の教育方法や研究環境などを改善するための組織的な取り組みのことです。

コロナ禍によって、FDは新たな変革の時期を迎えつつあります。今年度のFD事業は、質・量ともに進展しています。また今回の『FD Invitation 第39号』は、デザインを一新してお届けします。